

想いを届ける、パエリアバス

UN "PAELLA BUS" CON CORAZÓN



2011年3月11日に発生した東日本大震災は、日本に甚大な被害を与えました。

京都で4つのスペイン料理店を経営する株式会社バハルボールのオーナー、木下清孝さんが動いたのは、その直後。

「自分たちができることをやろう！今こそ自分たちを育ててくれた日本に恩返しする時だ！」。

バハルボールはチャリティレストランや、チャリティバルを精力的に開催。多くの義援金を寄付しました。それと同時に、さらなる思いもわき上がってきたのです。

「自分たちだからできる何かを、ダイレクトに届けたい」。

そして誕生したのが、パエリアバス。

今回はパエリアバス・プロジェクトの隊長、池上龍司さんが、その活動に懸ける思いを語ってくれました。



パエリアバスに描かれたイラスト

震災が起こって間もない3月下旬、私は会社の定休日を使って、東北に向かいました。まだ、被災地に関するさまざまな情報が錯綜している時だったので、自分に何ができるか見当もつきませんでした。でも、とにかく「被災地の現状を見なければならぬ」という気持ちが強かったので、わずか1日の定休日でしたが、「行けるところまで行こう」と。そして気仙沼などで被害状況を見ると同時に、最終的には塩竈にあるボランティアセンターで、当時の状況を詳しく聞かせていただいたんです。

その後、バハルボールではほぼ月に1回のペースでチャリティレストランやチャリティバルを開催し、売上を被災地に届けてきたのですが、もっと何かできることはないかという思いが社内にわき起こってきたのです。そして夏、店長が集まって会議している中、「パエリアを被災地に届けられないだろうか」という話が浮上り、実現に向けて準備することになりました。それともうひとつ、「日本全国から募ったスイセンの球根を植えて被災地を応援する」というスイセンプロジェクトをオーナーのお友達が行われていて、そこから「何か一緒にしないか？」というお話をいただいたことも、大きな契機となりました。では誰が中心となって計画を進めるかという話になった時、どの店舗の専属でもなかったこと、そして被災地に行ったことがある人間ということで、私が適任だろうという話になったのです。

計画がスタートしてからは現地との連携を図るとともに、そして現地でのどのような形でパエリアをつくり、提供するかの試行錯誤を繰り返しました。また、スタッフや機材、食材を搭載できる大きさの車を購入。見ただけでも元気が湧いてくるような鮮やかなイエローとパエリアのイラストでペイントを施しました。

そして2011年9月末、いよいよパエリアバスが初めて被災地に向かいました。目的地は釜石市にある仮設住宅。直径1メートルの

巨大な鍋4枚を使い、200人分のパエリアを提供しました。また、食材もサンマや野菜、米など、できるだけ地元のものを使用し、少しでも地域と関わるよう配慮しました。仮設住宅の人々の中には、初めて見る巨大なパエリアに驚く人、初めて食べるパエリアに笑みを浮かべる人もいて、本当に来て良かったと感じました。

その後、2011年11月には、秋の台風で大きな被害を受けた和歌山で開催されたチャリティイベントにもパエリアバスが出動。今年の5月には再び釜石を訪れてパエリアを提供してきました。

現在、各種チャリティの売上はもちろん、バハルボール全店舗で提供するパエリアの売り上げの一部をパエリアバスの運営資金に充てています。また、祇園祭などの行事やイベントにもパエリアバスは出動し、運営資金を集めています。

パエリアバスの合言葉は「おいしさと元気を届けます」。大きな鍋でつくったパエリアをたくさんの人と一緒に食べることで、よりたくさん笑顔をつくっていききたいと、私たちは考えています。今後は、東北の南部鉄でつくったパエリア鍋を使ったり、新しいパエリアをご当地グルメとして東北の方々と考えたり、被災地の方と一緒にパエリアをつくったりと、アイデアをどんどん実現していきたいですね。

私たちの仕事はパエリアをはじめとするスペイン料理を通してお客さまに喜んでいただくのが最大の目的。おいしいものを食べた時のお客さまの笑顔が自分たちの喜びなのです。そんな思いを持った仲間たちが集まったのが、バハルボールという会社です。これからも店舗の運営に加え、パエリアバスの活動を通じて、たくさんの人に笑顔と元気をお届けしていきたいと思っています。

(池上龍司)



写真上：喜んでいただけるよう、願いを込めて、一人一人に手渡します。
写真左：パエリアを食べて下さった釜石の皆さん



株式会社バハルボールでは様々なパエリアバス・プロジェクトを展開中です
詳細はウェブページをご覧ください！ <http://www.bajarbol.jp/>

隊長、池上さん(右から2人目)をはじめとするプロジェクトメンバーたち